



覗く眼

第14回

事件の全容は、ほぼ掴んだ-----源治はそう考えていた。けれども、これからどうすれば良いか？ 皆目見当がつかない。

人体実験の材料“マルタ”を保護し、この事件の真相を世に告発する。それが本来だ。けれども、この状況において、それは不可能だろう。

すべては、あの包帯の中から不気味に光る眼を出した異形の男、いや殺人兵器と言おうか。この男の存在のせいだ。源治の銃もこの男がいれば、有効な武器とはならない。源治が抵抗すれば今度こそ容赦なく、手首を切り落としてくるだろう。

源治は覚悟を決めていた。

牢の中の哀れなマルタたちは、源治をじっと見つめている。彼らにとって自分こそが唯一地獄へと垂れ下がる蜘蛛の糸だということは、十分に承知している。

けれども、あまりにも無力過ぎる。牢と源治の間に門番のように立つ包帯の男を仕留める手立ても策も、源治にはまったく思い浮かばない。

八代たちの狙いが何なのかはわからないが、おそらく自分はここで消されるだろう。あるいはあの牢の中に入れられ、名も無きマルタとして扱われていくのかもしれない。

けれども源治はもしもの場合に備え、この村の事や事件のあらましを、親しい記者たちに伝えていた。とりわけ圧力に屈しない、気骨ある連中にだ。源治の消息がこの村で途絶えれば、持ち前の嗅覚を発揮しこの事件について追及していくだろう。願わくば、源治の辿り着いた真相までを知り、世に出して欲しいのだが-----。

源治は不意に、八代に銃を向けた。大勢には影響せぬ蜂の一刺しであっても、一矢を報いねば自分は犬死だ。この場にやって来た事だけでなく、これまでの刑事人生の全てが否定されるような気持ちに対する抵抗。

もちろん駿足の殺人兵器に妨げられる可能性は、大きい。だから源治は何も言わず突然銃を上げた。それまでに八代の心臓の位置を見定め、銃を上げると同時に引き金を引く。その段取りを心の中に思い描きながら、源治はこれまでの人生すべてを総決算するよう、勝負を仕掛けた。ただ八代の姿しか、目には入っていなかった。

けれども-----首筋に小さな痛みがはしった。一瞬の痛みだった。源治は瞬時に体中が痺れ、手足から力が抜け、倒れ込んだ。意識までも、薄れていく。

それでも自分に起こった出来事を見極めようと懸命に目を見開くと、そこには小さな注射器を手にした、女の姿があった。

千鶴子。そう、この女がいたのだ。包帯の男の恐るべき戦闘能力。八代の皮肉めいた態度と驚愕すべき真実。それにすっかり心を奪われて忘れていたが、今この場にはもう一人敵がいたのだ。無論、若い女であったから油断をしていた、というのも否定はできない。

「大内さん、言い忘れてましたが、我々がアメリカに提供している研究には諜報、つまりスパイの養成というのがあります。彼女は、その一人です」

何を言いやがる。忘れていたんじゃないだろう。こういう事態を想定し、敢えて言い洩らしておいたのだ。この女の存在を忘れさせるために。千鶴子は源治を見下ろし、笑っている。まるでまんまと罠にはまった老いぼれ刑事を嘲笑うかのように。

「それと大内さん。少し訂正しておかないといけない。この殺人兵器は鍛えた訳ではありませんよ。つくったのです。意識や感情という余計なものを排した、人間そっくりの生き物をね」

それはまた、恐ろしい告白だった。いくら“心”がないとはいえ、ひとつの生命体をつくるなどという事を実現させているとは。確かにアメリカも、その研究を必要とするのは無理はないのかもしれない。けれども源治は薄れいく意識の中、もはやそれに声を荒げることもできない。

「さらに我々の研究は次の段階に行こうとしています。この生命を複製し、大量の・・・」
そこで源治の意識は途絶え、深く落ちていった。

源治は東京行き汽車に乗り、揺られていた。隣、そして向かい合う席には男が一人ずつ配されている。源治を見張るための連中だ。

「では、お元気で」

八代はそう言って見送った。

千鶴子の針のひと刺しにより体の自由を奪われた源治にしてみれば、それは皮肉でしかなかったが、源治を生かしたまま村から出したのは、好都合だった。

おそらく源治を始末した時、親しいマスコミ連中が動くのを危惧したのだろう。それで痺れ薬か何かでとりあえず体の自由と意識を奪い、東京まで帰すよう計画していたのだろう。源治がもしもの時のために考えておいたシナリオも見破られてはいた訳だが、それにより可能性はまだ残された。

手足は痺れ歩くのも容易ではなかったが、幸いな事に意識はだんだんとハッキリし始めていた。おそらく薬の効果が消えてきたのだろう。ただ舌が痺れ、声を出すことができない。だから千鶴子での恐るべき研究を誰かに伝える事はもちろん、助けを求めていく事も今はできない。

恐らく警察内部には手が回されていて、この事件はもみ消されうだろう。となると頼みの綱はマスコミしかない。源治は明瞭となってくる頭で、東京に着いてからこの見張りの男たちをどう撒くかだけを考えていた。頼みの綱は、東京の人ゴミだ。着くまでに体がどれぐらい動くようになるかはわからないが、あの雑踏の中に紛れ込めば、この男たちもすぐには探し出せない。見つけられたとしても、おいそれと手を出す事はできないだろう。源治は体の自由がもっと効くようになることを、ただ祈り続けた。

東京駅のホームは、相変わらず人でごったがえしていた。ここまでは源治の思う通りだった。ただ舌の痺れは相変わらずで、声を出そうとすると動物の呻き声のようになってしまう。足は千餓村を出る時よりは力が入るようになっていたが、それでも老人のように細かな足取りでしか歩を進めることができない。二人の見張りの男たちは、付かず離れず源治の後を着いて来ている。

源治は駅員の姿を見定めた。都合の良い事に、出口付近に立っている。源治は出口に向かう振りをして、駅員の元に行くのを目標にした。

例え言葉で伝えられなくても、何らかの異変には気がついてくれるはずだ。そして駅の構内でおこった事であれば、まずは駅長室に保護されるだろう。見張りの男たちが知り合いのようにして引き留めようとしても、源治が激しく抵抗すれば不審に思いすぐに引き渡すことはしないはずだ。

決して分が良いやり方ではなかったものの、今はこれに懸けるしかなかった。源治の体はじれったいほどうまく動かなかったものの、それでも確実に、駅員の元へと近づいている。あと数メートル。通常であればすぐに行ける距離も、今は牛歩のようにしか進めない。けれども確実に、射程範囲だ。この足でも、後数歩・・・そこで源治は、再び闇へと落ちた。千餓村で千鶴子に不意打ちを食らった時のように全身からスツと力が抜け、意識が飛んだ。

ただあの時と違うのは、朦朧とする間もなく、一瞬にして意識が無くなった事だ。源治が最後に見た景色には、果たして何が映っていたのか。

「大丈夫ですか」

黒いコート姿の男達が源治に駆け寄って行った。

(ヘン。見張りの野郎どもが、わざとらしい芝居しやがって・・・)

源治の口からは、そんな憎まれ口ももう聞こえてくる事はなかった。

「ごめんください」

「あら沢井さん、いらっしやい」

静の顔には、明らかな疲れの色があった。「おやじさんは？」

「寝床の方に」

沢井は奥の座敷に通された。縁側が開けられ、清々しい風が吹き込んでいた。

「おやじさん、ごぶさたしてます」

「沢井さんが来てくれましたよ」

静が口添えをしてくれるが、布団の中の源治はピクリとも動かない。目は開かれているが虚ろで、焦点は定まっていない。

「良くはならないけれど、悪くもならないですよ」

源治の妻、静は穏やかな口調でそう言った。何十年も連れ添ってきた夫が、病に倒れ自由が利かなくなったとはいえ小康を保っているというのは、やはり嬉しいのだろう。

けれども寝たきりで口もきけない、意識もあるのかどうかわからない夫の面倒を一人で見るのはやはり厳しいのだろう。静もまた、ずいぶんと皺が増えていた。

「急にこんな事になるなんて・・・」

沢井は言葉を呑んだ。静の方が何倍も悔しい思いをしているに違いないのだ。

千餓村から帰って来た日、駅のホームで源治は倒れた。体の自由も意識も失われ、もどに戻る事はなかった。自ずと警察も退職する事になり、早や半年近くが過ぎようとしていた。

「警察の方も、いらっしやってくださいるのは沢井さんだけですよ」

静はそう言って、悲しそうに笑った。娘夫婦が孫を連れてたまに来てくれるぐらいが、最近の喜びだと言う。

源治が最後に手掛けた事件。千餓村の殺人事件。結局は地元の県警に差し戻される事になり、沢井が関わる事ももう、無かった。

源治がどういった捜査を続けようとしたのかはわからないが、熱り立って向かった翌日に戻って来たのだ。進展は無かったのだろう。それが沢井の解釈だった。

そしてその帰路、東京に着くと間もなく病に倒れてしまったのは、不幸な出来事でしか無かった。千餓村の事件と源治が倒れたのに関係を見出す事は、誰にもできなかつただろう。

身動きひとつなく、ただ目を覚まし眠るだけの体になった源治に、意識はあるのだろうか。沢井や静はもちろん、医者も本当のところはわからないらしい。

「それじゃ、また来ますね。おやっさん」

もちろん源治から返事がかえてくることはない。ただ虚ろな目で、天井を見上げているだけだ。外では老木にとまったこの夏最後の蝉が、その短い一生を終えようとしながら、沢井の姿を見送っていた。

あとがき

最後に自分自身の言葉を綴るという行為をしようかどうか迷いましたが、読んで頂いた皆さまへの感謝の気持ちを込め、書かせて頂きます。

この『覗く眼』という作品を書き始めたきっかけは、一枚の絵（イラスト）からでした。痩せて顔中に包帯をした男が、恐ろしい眼で睨みつけている絵。雑誌に小さく掲載されているものでした。

書き始めの段階では展開やラストをほとんど考えて無かったので、タイトルと内容がいささか乖離してしまっているような印象も受けるのではないかと、思います。

また最終的には日本の敗戦、陰謀といったものになりました。ひと昔前の方にはアメリカ＝首謀者という内容は見慣れたものに映り、最近の人にはピンと来ないかもしれません。時代とともに潜在的恐怖を感じる国は変わる、という事でしょう。

ただ個人的には特定の思想といったものはありません。“楽しんでもらえば良い”というスタンスですので、ノンフィクションやエッセイというものでなく、小説というものを書いています（ですので多少なりとも事実を書くこのあとがきも、どうしようかと迷ったわけです）。

“楽しんでもらえば”という本来の点でいくと、自分の表現力の拙さで満足してもらえなかったらと思う、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

それにも関わらず読んで頂いたすべての皆さまに対して、最後に改めて、ありがとうございました。